



たてやま

おらがんまっち

南総祭礼研究会

2019.4 No.41



龍山市西岬地区

香

こうやつ

海水浴客が多かった昭和の頃までは民宿も多く、漁師も大勢いましたが、今は少なくなり長閑な風景が広がる、百世帯ほどの人々が暮らす海沿いの地区です。

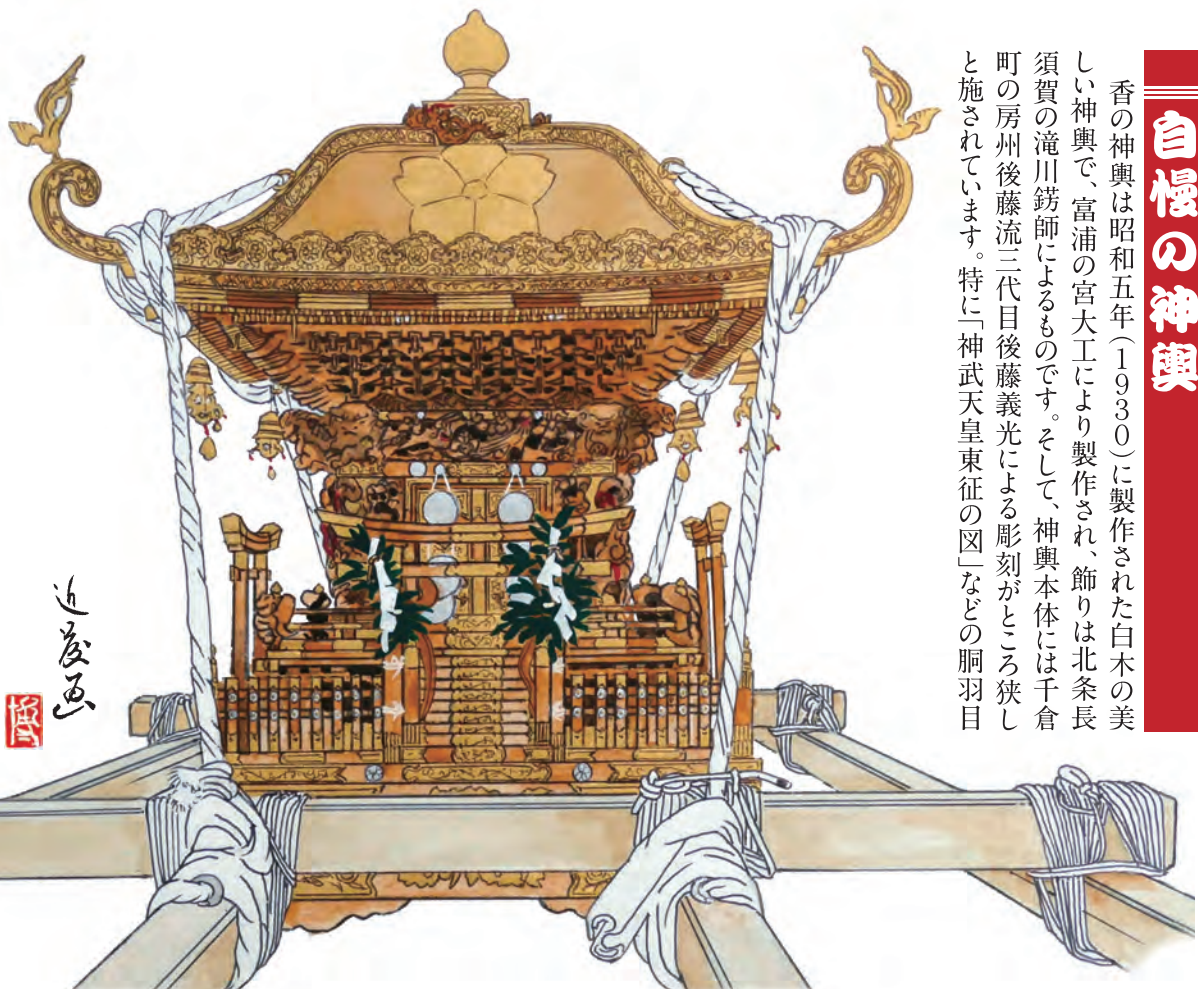
市の指定文化財になっている応永八年(1401)の宝篋印塔(ほうきょういんとう)、里見の出城と伝承される「要害」、室町時代の作と考えられる金剛寺にある「如意輪観音像」、今もはつきりと痕跡が見られる旧海軍航空隊の「掩体壕跡」などが残る歴史深い地区です。

鏡ヶ浦の南に位置する地区で、「香」と書いて「こうやつ」と読み、そのいわれは昔、谷のほうから良い香がしたからではないかと言い伝えられており、現バスの停の標識名には「香谷」と書かれています。また、平城京跡で見えられた奈良の都へアワビを運んだ荷札にも、香の語源と思われる「賀宝(かほう)かほり(かおり)」という地名と、「塩海(しおみ)」という地名が書かれていました。

地域の紹介

自慢の神輿

香の神輿は昭和五年(1930)に製作された白木の美しい神輿で、富浦の宮大工により製作され、飾りは北条長須賀の滝川鏝師によるものです。そして、神輿本体には千倉町の房州後藤流三代目後藤義光による彫刻がところ狭しと施されています。特に「神武天皇東征の図」などの胴羽目



近後画

- 屋根：延屋根 ● 方形：普及一直線型 ● 藤手：普及型
- 造：白木 ● 露盤：樹型 ● 柱：樺 ● 胴の造：二重勾欄
- 樹組：五行三手 ● 扉：前後扉 ● 鳥居：明神鳥居
- 台輪：普及型 ● 台輪寸法：三尺五寸
- 制作年：昭和五年 ● 制作者：富浦の宮大工
- 彫金：長須賀・滝川 ● 彫り物：三代目後藤義光



房州後藤流三代目後藤義光の彫刻(右下：神武天皇東征の図)

に施された彫刻は、どれも神輿本体から飛び出して来るような厚彫りの見事なもので、三代目後藤義光の代表作ともいえる彫刻です。神輿の重量はおよそ米俵9俵(約540キロ)と言われ、白木の大きな屋根には金に染められた桜紋が輝きます。平成三年(1991)には行徳・中台にて大殿神輿の大修理が行われ、同時に子供神輿も奉製されました。そして平成十二年(2000)には、大殿神輿奉製七十周年記念が行われています。祭礼日には白木の屋根に光る大きな「桜紋」が、夏の陽射しに照らされ誇らしげに揺れる自慢の神輿です。